様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３０３

研究課題名（和文）20世紀アフリカ系アメリカ文学の人権思想

研究課題名（英文）Human Rights in Twentieth-Century African American Literature

研究代表者
竹内　美佳子（TAKEUCHI, Mikako）

慶應義塾大学・商学部・教授

研究者番号：００２２７０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、20世紀アフリカ系アメリカ文学の人権思想を二つの観点から考察し、文学の有する社会的な力を探究した。第一に、アメリカン・ルネサンスの文学とアフリカ系アメリカ・モダニズム小説との間テクスト性に潜む意味を解読する。第二に、大恐慌期から冷戦期に至る歴史を背景に、作品群の表明する政治意識を分析する。公民権運動と脱植民地化の原動力となったアフリカ系アメリカ文学の社会的意義が、研究を通じて浮き彫りになった。

研究成果の概要（英文）：This project explores how twentieth-century African American literature has inspired the pursuit of civil liberties and human rights. This research examines the social characteristics of literary works by conducting (1)an intertextual analysis of the literature of the American Renaissance and African American modernism and (2)an interpretation of African American writings against the historical background of the period from the Great Depression to the Cold War. Based on close reading of works from the socio-political viewpoint, this study portrays African American literature as the main motivating factor for the Civil Rights Movement and decolonization.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アフリカ系アメリカ文学　アメリカン・ルネサンス　リチャード・ライト　ラルフ・エリスン　ハーマン・メルヴィル　公民権運動　脱植民地化

１．研究開始当初の背景

アフリカ系アメリカ文学が人間解放の原動力となる過程には、時代を超えた思想遺産の継承が読み取れる。本研究の着想は、ラルフ・エリスンと実存哲学との関わりを、共著『イン・コンテクスト――Epistemological Frameworks and Literary Texts』（筑波大学アメリカ文学会、2003）に論じたことが、契機となった。

公民権運動に思想的基盤を与えた 19 世紀作家ヘンリー・デイヴィッド・ソローの研究に臨み、第一長編に奴隷解放思想を読み取る発表を、日本ソロー学会（2005）で行なった。形而上詩人ジョージ・ハーバートとソローの共振性がこの研究に浮上し、論文「ソローの瞑想的パストラル――『コンコード川とメリマック川の一週間』」（2011 年 8 月）を日本ソロー学会に寄稿した。（『ソローとアメリカ精神――米文学の源流を求めて』所収。日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費学術図書、金星堂、2012）。ラルフ・エリスンのソロー再評価についても研究を進め、日本ソロー学会のシンポジウム（2010）において発表した。

上記の考察に基づき本研究では、アフリカ系アメリカ文学に対する 19 世紀作家ハーマン・メルヴィルの影響を探ることが、中心課題となる。メルヴィル最後の小説を典型とする喜劇の系譜にエリスンを論じる批評が 1960 年に現れ、20 世紀末には人種的視点から両作家の共通項が指摘された。アフリカ系アメリカ人作家がメルヴィル文学に加えた重層的解釈を読み解くことは、新たな意義ある研究となる。

２．研究の目的

20 世紀アフリカ系アメリカ文学を牽引したリチャード・ライトとラルフ・エリスンに注目し、文学の社会的力を考察するのが本研究の目的である。

ライトは、文学史上初めて本格的にアメリカ南部農本社会と北部工業都市の人種問題を描き上げ、アフリカ系アメリカ文学を世界文学の位置に高めた。故国を離れ亡命作家となるライトは、欧州からアフリカとアジアに向かい、地球規模の移動を続けながら現代世界に発信した。

対照的にエリスンは、19 世紀奴隷解放運動の中心地ニューイングランドに拠点を定め、民主主義の理念とアメリカの自己矛盾とを問い直す。小説家エリスンは、アメリカン・ルネサンスの奴隷解放思想をいち早く評価した批評家でもある。19 世紀文学の真価を、アフリカ系アメリカ人の見地から深く理解したエリスンは、奴隷解放思想を 20 世紀の公民権運動に繋いだ文学者である。

反抗精神と共生思想に貫かれたライトとエリスンの文学は、公民権運動と脱植民地化運動に力を与えた。本研究では、人間解放を促したアフリカ系アメリカ文学の社会的意義を、冷戦時代に至るまでの歴史を背景に探究する。

３．研究の方法

(1) ラルフ・エリスンの評論群に展開される 19 世紀文学論を解読する。エリスンは小説に加え、音楽・文学・社会を論じる評論を著した。千頁を超える評論群よりアメリカン・ルネサンスに関わる内容を抽出し、エリスンの文学批評家としての先見性を、批評史の視点から捉える。その上で、エリスンが独自の 19 世紀文学論を長編小説に組み込んでゆくモダニズムの技法を、小説『見えない人間』に分析する。

アメリカン・ルネサンスとエリスン作品との間テクスト性を解読するに当たっては、ハーマン・メルヴィルに焦点を当てた研究を行なう。エリスンの論及した作品群と、それに先立つ前期小説を対象に、メルヴィルの奴隷解放思想を考察する。

(2) リチャード・ライトとラルフ・エリスンは、大恐慌期に左翼思想と関わりながら影響関係を結び、冷戦期に対照的な発展を遂げる。激動の時代を生きた両作家の創造軌跡について、伝記的研究を行なう。包括的評伝に加え、ライトに関しては FBI ファイルと CIA 監視記録とを解析する文献、エリスンについては公民権運動期の社会情勢を扱う講演録が、主たる対象となる。これら複数の記録を照合することにより、ライトとエリスンの政治意識を究明する。

４．研究成果

20 世紀アフリカ系アメリカ文学が、19 世紀の思想遺産を継承発展させ、民族多元主義の新たな気運を文学批評と社会運動にもたらしたことを、本研究は明らかにした。

(1) エリスンのメルヴィル論

ラルフ・エリスンの『見えない人間』（*Invisible Man*, 1952）は、公民権運動の幕開きを告げる書となった。エリスンにとって小説を書くことは、古典を読み直す行為と表裏一体である。評論集『影と行為』（*Shadow and Act*, 1964）に記すとおり、アメリカ文学は自身の「声」を見出す原動力であると同時に、そこに構築された世界像から新たな意味を引き出す企図へ駆り立てる存在でもあった。

ニュー・クリティシズムの席捲する時代にあって、文学作品に歴史的・政治的文脈を読み込むエリスンの姿勢は、批評史に独自の位置を占める。アメリカン・ルネサンスの奴隷解放思想に光を当てた点で、エリスンの批評眼は極めて先見的である。

既存の批評で「見えないもの」にされる傾きがあったアメリカン・ルネサンスの社会的価値を、エリスンは自らの小説を通じて解釈し直す。エリスンの『見えない人間』には、

ハーマン・メルヴィルの『白鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851)、「バートルビー」(“Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street,”1853/56)、「ベニート・セレノ」(“Benito Cereno,”1855/56)、『信用詐欺師』(*The Confidence-Man: His Masquerade*, 1857)に対する暗喩的言及が読み取れる。魅せられた旋律に変奏を展開し、音楽のもつ意味を発展させるジャズマンの如く、エリスンはアメリカの古典を読む。

メルヴィルを反奴隷制の作家として論じる批評は、公民権運動以降に顕在化する。民族多元主義に基づく批評は、キャロライン・カーチャー(Carolyn L. Karcher)の著作を中心に1980年代から本格化し、21世紀転換期にかけて隆盛をみる。かかる批評史の中で、エリスンは早くも1945年の論考で、アメリカン・ルネサンスの文学が、奴隷制度を道義的問題の核心に据えることを看破した。19世紀文学のもつ社会意識の真価を、エリスンは自らの「他者性」という位置取りから洞察する。『見えない人間』は、人種主義に依って立つ近代西洋にメルヴィルの突きつけた問いを、テクストの深層から反響させるモダニズム小説である。

(2) メルヴィルの初航海小説にみる奴隷解放思想

メルヴィルの社会意識は、現代アフリカ系アメリカ文学の先駆者であるライトとエリスンを強く共鳴させた。メルヴィルの奴隷制批判は、1839年の初航海に萌芽する。リヴァプールへの初航海体験をもとに書かれたのが、小説『レッドバーン』(*Redburn: His First Voyage*, 1849)である。綿花を積む貿易船に乗り組み、英米の奴隷制経済を繋ぐ大西洋を往還した体験から生まれた自伝的小説は、メルヴィルの社会意識を知るうえで重要な意味をもつ。

大西洋を見つめるメルヴィルの視点は、アフリカ系アメリカ文学と重なり合う。リチャード・ライトはアフリカ旅行記『ブラック・パワー』(*Black Power*, 1954)において、大西洋を「罪業の海」と呼び、民族離散させられた奴隷の身体を現前させる。ラルフ・エリスンは遺作『ジューンティーンス』(*Juneteenth*, 1999)の中で、奴隷船を海上の棺にたとえ、米国史を象徴する船としてメイフラワー号に対置させる。

メルヴィルは『レッドバーン』で、リヴァプール港に大鐘を打ち鳴らし、海底に沈んだ魂を弔うように過去への挽歌を響かせる。繁栄する港に描かれるのは、ギニア湾から来た奴隷船や、サウス・カロライナ産綿花を積む貿易船である。リヴァプールの裏路地に目撃される極貧は、アメリカの貧民がもっぱら黒人であることを逆照射する。アメリカでは「市民」として生まれることが貧困の回避を保証するが、市民権の根幹は「選挙権」であろう。メルヴィルはそう付言して、「民主主義国家」アメリカの奴隷制度を批判する。

メルヴィルの描く帰路の船内は、移民を乗せた船でありながら、オラウダ・イクィアーノ(Olaudah Equiano)の奴隷体験記を彷彿させる。メルヴィルの少年期から初航海小説執筆に至る時期は、海洋旅行記の全盛時代であった。アメリカの教養人が欧州の城や寺院を探訪する異国情緒の旅行記とは異なる視点を、メルヴィルは導入する。『レッドバーン』は、奴隷制度の不条理をテクストの背後から炙り出す革新的な航海小説である。

(3) ライトと現代世界

ライトとエリスンは大恐慌期に、ニューディール政策連邦作家計画のニューヨーク・プロジェクトに携わる。両作家は、研究活動を独創へと導いた。ライトの『千二百万人の黒人の声』(*Twelve Million Black Voices: A Folk History of the Negro in the United States*, 1941)は、植民地時代に遡る歴史研究から生まれた民族的叙事詩である。エリスンの調査研究にはニューヨークの裁判記録が含まれ、法の知識は作家の社会感覚に厚みを増した。ハーレム地区で収集した民間伝承は、長編小説『見えない人間』のピカレスク的特質に発展する。

ニューディール政策には反黒人的な側面もあり、南部民主党を意識するフランクリン・ローズヴェルト大統領は、公民権を政策課題とせず、連邦反リンチ法と投票税廃止法の支持も表明しなかった。しかし、フーヴァー前大統領が最高裁判事に白人優越主義者を任命したのに対し、ローズヴェルトは史上最も多くのアフリカ系アメリカ人顧問をホワイトハウスに迎え、内務省、商務省、労働省の要職にも任命する。

修正主義的歴史観に基づき、ニューディール政策の人種的ステレオタイプには一定の改善がなされ、公共事業促進局(WPA)の事業が立案された。連邦作家計画(FWP)は、1920年代のハーレム・ルネサンスに顕著なエキゾシズムとは異なる角度から、アフリカ系アメリカ人の歴史とアメリカ社会の現実に対する認識を促した。しかし、1938年に非米活動委員会が組織されると、ライトは連邦作家計画を攻撃する委員会証人によって「国家の異分子」と糾弾された。1947年にフランスで亡命作家となるライトは、アメリカ国家機関の監視網に包囲される。

核戦争の惨禍と冷戦構造の呪縛に対峙する視野を、ライトは国家権力との確執ゆえに獲得した。欧州から西アフリカと東南アジアに向かうライトは、1955年に公民権運動が始まる時、アメリカ南部の人種統合が世界の脱植民地化と連動することを直観した。人類共通の生存権という認識に立つ公共圏の醸成を、核時代の世界に求めるライトの後期作品は、サイード(Edward W. Said)に始まるポスト・コロニアリズムの先駆けである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① Mikako Takeuchi, “Foregrounding Otherness: Ralph Ellison’s Interpretation of Melville’s Works,” *Sky-Hawk: The Journal of the Melville Society of Japan*, 3 (2015): 5-20. **査読有**

② **竹内美佳子「ソローと現代アメリカ文学」『命の泉を求めて――日本ソロー学会 50 年の歩み――ヘンリー・ソロー研究論集』特別号** (2015): 58-59. **査読有**

〔学会発表〕（計 3 件）

① Mikako Takeuchi, “Foregrounding Otherness: Ralph Ellison’s Interpretation of Melville’s Works,” The Tenth International Melville Conference: Melville in a Global Context, 27 June 2015, Keio University, Tokyo.

② **竹内美佳子「*Redburn*――見る主体への航海」第 3 回日本メルヴィル学会年次大会、2014 年 9 月 14 日、専修大学（東京都千代田区）**

③ **竹内美佳子「前景化する他者――ラルフ・エリスンの読むメルヴィル」日本アメリカ文学会第 52 回全国大会、2013 年 10 月 12 日、明治学院大学（東京都港区）**

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　美佳子（TAKEUCHI, Mikako）
慶應義塾大学・商学部・教授
研究者番号：00227000

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：